ワイン課通信
2月特大号

第二部

ビオディナミ農法

オザミとは切っても切れない自然派ワイン！そこでよくでてくるビオディナミ農法
でも、いったいビオディナミってなに？って質問多いと思います。
そんな質問の答えになるかはわかりませんが、
あのニコラ・ジョリー氏が来日した際のセミナーの内容をご紹介します

ニコラ・ジョリー氏のビオディナミ農法

植物を育てるのによく石灰水を使用します。多く与えればより多くの芽が育つと思われがちですが、
意外にも溶液の割合が薄いほうが、芽が生長すると言う実験データがあります。
どうしてこのような現象がおきるかと言いますと、「エネルギーの力」を利用したからです。
生命は、引力の影響を受けますが、物質的なものだけに依存しているわけではありません
石灰水の例からも、薄めれば薄めるほど物質をつくっている力から解放されてくるのが
分かります。
葡萄の樹を育てるときにも、目に見えている物質だけを使うのではなく、
樹の個性をうまく引き出して、
その裏にあるエネルギーによって表現させてやるのがビオディナミの作用なのです。
雪の結晶は、芸術的で美しいものです。しかしこれは、誰がつくったものでもなく、
、自然の力が造り出した美の彫刻です
こうした目に見えない自然の力を利用することもビオディナミです。
ーガニック農法のように目に見える物質を畑や葡萄の樹にもたらすことで成長を変えていく農法とは大きく違い
ビオディナミはさらに進化して、物質的なもの、その背景にあるものに働きかけて
葡萄の樹を育てていく農法といえます。
ビオディナミのノウハウをしっかりと理解したうえで、その土地に応用させると、その土地や気候に
適した動物も決まってきます

動物の特徴によって、それぞれ用途の違った堆肥が出来上がります。
まず豚は、地球の重力に支配されている動物なので、自分の食料を探す為に
一生懸命土を掘って植物の根を掘り出し食べます。この豚の堆肥を使用すると、
葡萄の樹を大きく立派に成長させることが出来るかも知れませんが、
大きな樹になる葡萄の実からは美味しいワインは造れません。
馬は、熱や太陽とつながりがあるので、
常に「上に引っぱられる太陽の力」と係わりを持つ動物です。
馬の堆肥を使用すると、非常に味わい深いワインが出来上がります。
雌牛は、水平的な生き物、つまり上に引く力と下に引く力のちょうど真ん中にあたる動物なので、
雌牛の堆肥は素晴らしい効果があります。文明の中で、雌牛は聖なる動物としてみられてきました。
ヤギのように、行ったり来たりする行動をするものは、水星と大きな係わりを
持っているものが多いのです。
水星は葡萄の樹と係わりを持っていて影響を与える星です
畑の周りにある風景の中にも、熱や光や水に対して様々な特徴をもった植物があり、
また更に多様性のある昆虫たちを引き寄せ連鎖によって係わり合いながら、
土壌の中の微小生物を育てていきます。
根は微小生物が存在しなければ、立派に成長できません。

生命の力はラセン形という形を取りながら地球に降りてきています。
ラセンという形状は、物質が徐々に濃縮されていく時ラセンの形状を取るのです。
真ん中に中心があり、周りはそのプロセスで物質が中心に向かって集まってきます。
葡萄の樹も、春と秋の姿を比べてみると、秋の葡萄の樹は葉も茂って、果実も実り
多くの物質と共に生きていると言えます。
春には何も無い状態のものが、秋には何かが有る状態となり、具体的な形をとって
物質化する、その過程に働きかけるのが、実はビオディナミなのです
ラセンとはまさにエネルギーの中心ともいえるでしょう。獣医学を学んだ人の中には、

ラセン＝エネルギーの中心　を利用することで、様々な病気を治した素晴らしい医者もいました。

近代農法では、病気が発生すると化学薬品などを使って、ただ単純に生命を復活させればよい
と考えますが、病気に対して戦いを挑んではいけません。もしも、周りのものが健全な状態であれば、
病気は健康体に取り付くことは出来ないはずです。病気というのは、弱まってしまったものを
この世から排除する為に現れる現象なのです。
健全な生命を復活させてあげれば、当然のことながら病気は発生しません。
なによりも、命というものは、波動であり、それを妨げるようなことの無いように注意して頂きたい
世界中の葡萄農家が、ビオディナミを実践すれば、生命が強化されてすばらしい流れになると思います。

以上がニコラ・ジョリー氏の説明です。
かなり分かりやすく表現してくれているのですが、やっぱり難しいですね。
つぎは、オーストリアのニコライホフ醸造所のオーナー夫人、クリスティーネ・サースさんの
ビオディナミ農法の説明です。

ビオディナミは、人智学をおこした哲学者のルドルフ・シュタイナーの思想がベースになっています。
彼に関する人智学研究センターは日本の京都にある大学内に設けられてます
どうして日本なのかと思われるでしょうが、
その場所には特別なエネルギーがあると信じられているために、
人智学研究センターもそこに集約されたわけです。
ルドルフ・シュタイナーが1924年、今から80年も前に
「最良な畑を耕すには、有害なものを追い出し排除してしまえばよいのではなくて、
大切なのは、人と動物と植物、そして天空とのハーモニー（調和）をもう一度取り戻すことである」
と語っていました。
また、「農薬や化学肥料を使った農法を取り入れていくと、本来植物がもっている必要なエネルギーを
全て奪い取ってしまい、それを食べる人間も、また少量のエネルギーしか得られなくなっていくだろう」
と述べています。
いま、私たちが食べている植物は姿、形は美しく目に映りますが、栄養面においては
大変乏しくなってきています。シュタイナーは、当時から
「生きているものと死んでしまったものとは、はっきりと大きな違いを表す」
といっていました。
植物が育つ過程には、天空のあらゆる星の力がとても大きな影響を及ぼしているので、
私たちは、星からの力を理解して認めなければいけません。土壌を破壊してしまえば、
人間が生きていくうえで、十分なエネルギーを受けられません。
私は30年以上も前にシュタイナーの思想に出会い、正しいと判断し、
彼のやり方に従っています。
ビオディナミで造られたワインは、ただ単に美味しいだけでなく、
より多くのエネルギーを与えてくれます。
生きる為の力＝エネルギーを持っていると、生きていてる喜びも大きく、楽しく、
気分の良いものではないでしょうか

シュタイナーは病気で弱ってしまった土地には調剤の使用を考えました。
牛は、4本の足をしっかりと大地につけて立ち、頭に伸びている角をアンテナとして、
天空から流れてくるエネルギーを集約することが出来る唯一の動物なのです。
ビオディナミでは、宇宙からの情報を受け取る為に生えているとされる、
雌牛の角をつかって調剤を造ります。。
角に牛糞を詰めたものを、冬の間地中に埋めて、直接エネルギーを与えます。
春には、冬越えさせた牛糞に水晶の粉を混ぜ合わせたものを地中に埋め、
秋に取り出します。
水晶の粉は１haあたりコーヒースプーン１杯ほどで足ります。
ビオディナミでは、２haの畑に対して８０ℓの水で調剤を希釈して、
左方向に１分間攪拌し、次に右方向に１分間攪拌して、
この作業を１時間繰り返し混ぜることで、混ぜる時に出来る
ラセン状で渦潮のようなスジが、ほんのわずかな調剤の情報を水に伝える役割をはたしてくれます
伝達力は非常に強いので、このように攪拌して出来た５haに１滴たらすだけでも
土壌に有効に働きかけます。
調剤から出来たエネルギーは、わずかな量でも大きな効力を発揮するのです。

水晶で作った調剤は、秋に葡萄の葉へ霧状にほんのわずか散布するだけで、
葉の本来持っている免疫力が高まり、天空からエネルギーをより吸収しやすくなるのです。

ワインの品質はアルコール度数や糖度を指す数字だけで評価するのではなくて、
ワインの本当のクオリティを分析する方法があります。
ワインの持っているエネルギー量や抗酸化力の高さを分析します。
たとえば、ビオディナミ農法の葡萄でつくったワインと従来からの
農法でつくられたワインを顕微鏡でみると、核の存在の有無が分かります。
１滴のワインをみるだけでも、葡萄畑の土地の状況や、土壌の環境などすべてが分かってきます。
葡萄畑の土壌は、ハングリーな土地のほうが高いクオリティを持っている為に
微量な肥料で十分です。ハングリーな土地とは、ほうりっぱなししておく
という意味ではなくて、葡萄の樹が自分で栄養を探しにいけるような根の状態に
しておいてやることです。
たとえて言えば、おなかが空いていれば栄養分を求め１０mも１５mも根を張ることがあります。
一方、化学肥料をたくさん与えすぎると、おなかが空かないので根が伸びようとはしません
豊富な栄養の中毒症ともいえます。
今、地球上のほとんどの植物が栄養を与えられるのを待つ中毒症になっていることを
考えると、とても恐ろしいとおもいませんか

シュタイナーは日々出来る簡単なことを継続することで、自然に応用させ、
自然に生きよといっています。
基本的なことが分かっていれば、自然と生きることは大変シンプルな方法だとおもいます。
葡萄の樹はもともとそこに住む虫たちといろいろな関係を保つことで大夫で
良い樹に育っていきます。
私の農園では、カブトムシの為に植物を刈らないでおいたり、鳥たちの為に周りには
木があり、うさぎたちのために低い木や下草が生えています。
ニコラホーフのワイナリーは世界の中で最も健康的なワインをつくる
として、ワイン醸造所で初めて表彰していただき、大変光栄に思っております
ワインの持つ力で大切なのは、十分な栄養があり、健康的な葡萄であるテイストが
重要になってくるのです。
農薬、除草剤、化学肥料などの植物を保護する目的の物質というものは、
基本的に殺すという観点からスタートしているので、
最終的には地上にある全てのものをなくす可能性が高いのです。
シュタイナーの言葉に、
生きているものだけが、次の生命力を生み出すことが出来る
と有ります。
この考え方は、民族や言語が違っていても、同じ１つの太陽の光の下で生きる
全てに共通していて、世界に通用する考え方です。

以上がセミナーの内容です。
やっぱり難しい内容だったと思いますが、
自然の力を引き出して、自然なまま葡萄を育てる
そのプロセスが少し難しいだけだと思います

ビオディナミ…これを読んで少しは分かりやすくなったでしょうか？
いや～ほんとに奥深いですよね
でも、ひとつだけ忘れないでください、先月のワイン課通信にもありましたが、
ビオディナミ農法はあくまで葡萄を栽培する農法であり
ワインを醸造する方法ではないことを

ヴァンピックル　加藤晃央